8 金貨の改鋳

お金の質と量を変える

Remintings of Gold Coins

「改鋳」とは？

What Is Reminting?

改鋳とは、金属でつくられた貨幣の重さや、貨幣に含まれる金銀などの割合（品位）を変えることである。江戸時代には、何度も改鋳が行われた。幕府は、多くの改鋳で貨幣の重さや含まれる金銀の割合を減らした。

金貨の移り変わり —小判—

最初につくられた慶長小判と最後につくられた万延小判とを比べると、1両の重さは約1/6になり、含まれている金の量は約9割減った。

慶長小判
Keicho Koban
1601年
品位84%
重さ18g

慶長一分金
Keicho Ichibukin

小判と一分金
小判（1両）と一分金（1/4両）とは常に同時に発行され、重さも金の含有量も正確に4：1につくられている。

元禄の改鋳
5代将軍綱吉に仕えた荻原重秀は、貨幣の流通量を増やし、また改鋳で得た利益（出目）で寺社造営や明暦の大火後の江戸復興などに伴う財政赤字を埋め合わせた。

元禄一分金
Genroku Ichibukin

元禄二朱金
Genroku Nishukin

元禄小判
Genroku Koban
1695年
品位57%
重さ18g

宝永一分金
Hoei Ichibukin

宝永小判
Hoei Koban
1710年
品位84%
重さ9g

正徳・享保の改鋳
6代将軍家宣・7代将軍家継に仕えた新井白石は、貨幣の悪鋳が将軍の威信低下につながっていると考え、威信回復のため貨幣に含まれる金銀の含有量を慶長金銀と同等とした。

正徳一分金
Shotoku Ichibukin

正徳小判
Shotoku Koban
1714年
品位84%
重さ18g

享保一分金
Kyoho Ichibukin

享保小判
Kyoho Koban
1715年
品位87%
重さ18g

◆改鋳の目的
改鋳の主な目的は、流通しているお金の量や物価の調整、改鋳で得られる利益による幕府の財政赤字の補てん、傷んだ貨幣の回収と新しい貨幣との入れ替えなどであった。

◆金貨がつくられた場所 —金座—
江戸時代初期の金貨は、各地の小判座で金貨に仕上げて御金改役所（後藤役所）に納められた。元禄の改鋳の際は、江戸の本郷の製造所で後藤家の指示のもと金貨がつくられた。
その後、日本橋の後藤役所の敷地内に製造所を移し、金座とよばれるようになった。

天保五両判
Tempo Goryoban
1837年
品位84%
重さ34g

改鋳益で財政赤字を埋め合わせるために発行されたが、発行額は多くなかった。

元文の改鋳
幕府は、元禄の改鋳と同様に流通する貨幣の量を増やした。従来の貨幣を引替える際には、品位を低下させた新しい貨幣を多めに渡した。その後80年以上にわたり改鋳は行われなかった。

元文一分金
Gembun Ichibukin

元文小判
Gembun Koban
1736年
品位66%
重さ13g

天保一分金
Tempo Ichibukin

天保二朱金
Tempo Nishukin

天保小判
Tempo Koban
1837年
品位57%
重さ11g

文政の改鋳・天保の改鋳
文政の改鋳・天保の改鋳では元禄の改鋳と同様に、改鋳益で財政赤字を埋め合わせた。

文政真文二分金
Bunsei Shimbun Nibukin

文政草文二分金
Bunsei Sobun Nibukin

文政一分金
Bunsei Ichibukin

文政一朱金
Bunsei Isshukin

文政小判
Bunsei Koban
1819年
品位56%
重さ13g

安政二分金
Ansei Nibukin

安政一分金
Ansei Ichibukin

安政小判
Ansei Koban
1859年
品位57%
重さ9g

万延の改鋳
金銀比価が国内と海外とで異なっていた状況を改めるため、金貨に含まれる金の量を大幅に減らした。
開港直後に行われ、改鋳益の一部は従来の金貨を持っていた人々に支払われたが、大半は財政赤字の埋め合わせに使われた。

万延一分金
Man'en Ichibukin

万延二分金
Man'en Nibukin

万延小判
Man'en Koban
1860年
品位57%
重さ3g

万延二朱金
Man'en Nishukin

topic

金貨のできるまで

The Making of Gold Coins

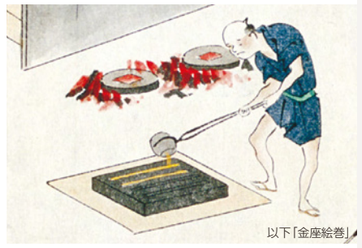
金貨は、槌などでたたいて形を整える「鍛造」により仕上げられた。
江戸時代の金座の様子を描いた絵巻から金貨のつくり方がわかる。

金貨のつくり方

1 金と銀の混合物から金を抽出する。

「佐渡金山之図」

2 地金を溶かして鋳型に流し込み、棒状の棹金をつくる。



以下「金座絵巻」

3 棹金を打ち延ばして延金をつくる。

4 1両の重さに切った延金の切片を小判の形に打ち延ばす。

5 小判の表面に槌目をつける。

6 小判の表面に薬品を塗り、火にかけ表面の銀を取り除き、金のみを残す処理をする。

7 検査を終えた小判を紙で包んで封印する。

8 作業を終えた金貨を蔵へ納める。

再現 小判の色付け（色揚げ）

色付け前 ⇒ 色付け後

1 表面に薬品を塗る。

2 薬品を塗った小判を焼く。

3 水につける。

4 ブラシでこする。

画像提供：国立歴史民俗博物館

品位をはかる

金貨の純度（品位）を鑑定する際には、金貨を試金石に擦りつけ、その条痕（筋状の痕）を試金棒の条痕と比較した。

試金石・試金棒で金の品位をはかる様子　「金座絵巻」

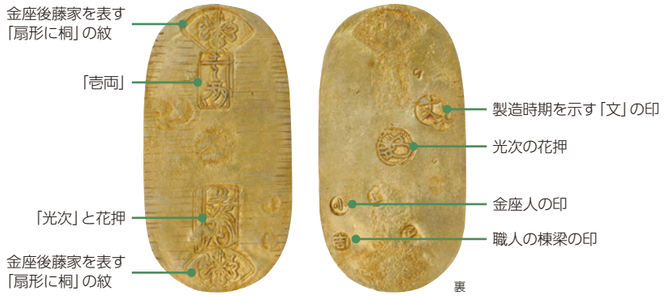
試金石　試金棒

極印による貨幣の品質保証

金貨・銀貨の品質を保証するために極印が打たれた。

「金座絵巻」

極印打ちの様子
金を小判の形に整えた後、極印が打たれた。



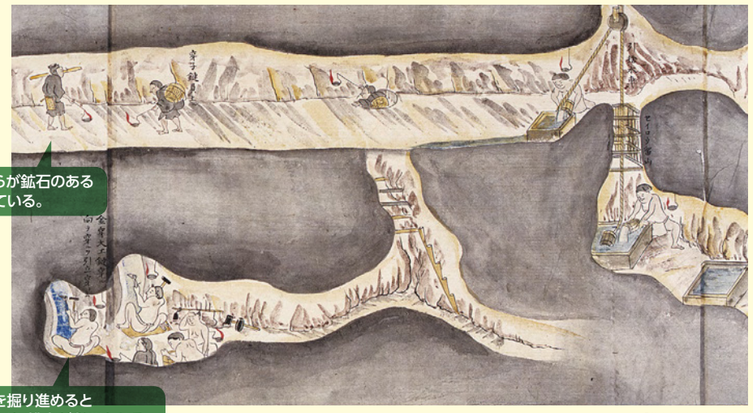
元文小判

扇形に桐　極印　丸に文

金貨の製造にあたった後藤家は、桐紋、花押、額面などの極印を打った。

金属の採掘と製錬

金属貨幣の素材である金銀や銅は、鉱山から鉱石を掘り出し（採掘）、その鉱石から金属成分のみを取り出す製錬の工程を経て、貨幣の材料となった。



「佐州金銀採製全図」

9 大判の移り変わり

Transformation of Gold Coins: *Oban* Gold Coins

大判とは？

What Is an *Oban*?

大判は、大型の楕円形の板金に墨書をした金貨で、主に贈答などの儀礼の場面で使われた。
大判をつくった後藤家は、室町幕府に仕えていた彫金師であった。その後、豊臣秀吉に命じられて初めて天正大判をつくり、江戸時代にも引き続き大判をつくった。

基準化された大判

天正大判より前に日本でつくられた金貨は、重さや品位が一定せず、使うたびに秤で重さをはかる必要があった。
天正大判以後につくられた大判は、重さや品位が基準化された。

いずれの大判も表に文字が墨書され、品質を保証している。

重さを示す「拾両」（約165g）

桐の極印

製造者の名前「後藤」

花押（サイン）

天正大判（天正長大判） 原寸
Tensho Naga Oban
16世紀後半
品位70～76%

慶長大判
Keicho Oban
1601年
品位：68%

元禄大判
Genroku Oban
1695年
品位：52%

享保大判
Kyoho Oban
1725年
品位：68%

天保大判
Tempo Oban
1838年
品位：68%

万延大判
Man'en Oban
1860年
品位：37%

memo

後藤家の仕事

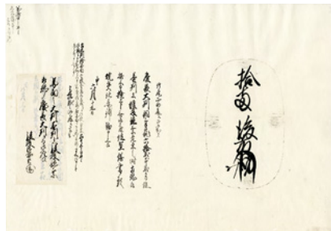
後藤家は、室町幕府や織田信長、豊臣秀吉に仕え、刀装具などを製作する彫金を仕事にしていた。
その後、徳川家康に仕え、彫金技術を活かした刀装具の製作、備蓄用の大分銅（金銀塊）や分銅、大判の製造・鑑定や墨書の書き直しなどを行った。

16世紀末、後藤家5代目徳乗の弟子であった庄三郎は、徳乗の代わりに江戸に赴き、後藤家から後藤の苗字や桐紋の使用を認められた。その後、後藤庄三郎家は金座を代々支配した。

裏（部分）
顕乗の銘

小柄（こづか）
刀剣のアクセサリー（刀装具）のうち、鞘に入れる小刀の柄。
裏に7代目顕乗の銘がある。

分銅
両替屋で使われる分銅は、後藤家の製造あるいは分銅改の検印があるもののみ、使用が認められた。



慶長大判鑑定の図と解説
後藤家が幕末に鑑定した文書。大判の上下左右に桐紋が描かれ、後藤徳乗の晩年の墨書であることが記されている。

10 銀貨の移り変わり

Transformation of Silver Coins

銀貨の改鋳

Remintings of Silver Coins

幕府は、金貨だけでなく銀貨の改鋳も行った。18世紀後半からは、丁銀など匁建ての秤量銀貨を回収して、両建ての計数銀貨を発行した。

銀貨の変遷 幕府は、多くの改鋳で含まれる銀の割合を減らした。最初につくられた慶長丁銀と最後につくられた安政丁銀とを比べると、同じ重さの銀貨に含まれている銀の量は約6分の1に減った。

宝永丁銀 幕府は5年間で4種類の丁銀を発行した。

慶長丁銀・豆板銀
Keicho Chogin and *Keicho Mameitagin*
1601年
品位80%

元禄丁銀・豆板銀
Genroku Chogin and *Genroku Mameitagin*
1695年
品位64%

宝永（二ツ宝）丁銀・豆板銀
Hoei Futatsuho Chogin and *Hoei Futatsuho Mameitagin*
1706年
品位50%

宝永（永字）丁銀・豆板銀
Hoei Eiji Chogin and *Hoei Eiji Mameitagin*
1710年
品位40%

宝永（三ツ宝）丁銀・豆板銀
Hoei Mitsuho Chogin and *Hoei Mitsuho Mameitagin*
1710年
品位32%

宝永（四ツ宝）丁銀・豆板銀
Hoei Yotsuho Chogin and *Hoei Yotsuho Mameitagin*
1711年
品位20%

◆銀貨の製造と大黒常是

大黒常是は、徳川家康に抜擢され、銀貨の製造にあたり、その後、銀座の銀吹極・銀改役として代々銀貨の製造にあたった。

正徳丁銀・豆板銀
Shotoku Chogin and *Shotoku Mameitagin*
1714年
品位80%

元文丁銀・豆板銀
Gembun Chogin and *Gembun Mameitagin*
1736年
品位46%

裏

明和五匁銀
Meiwa Gomommegin
1765年
品位46%

裏

明和南鐐二朱銀
Meiwa Nanryo Nishugin
1772年
品位98%

文政丁銀・豆板銀
Bunsei Chogin and *Bunsei Mameitagin*
1820年
品位36%

天保丁銀・豆板銀
Tempo Chogin and *Tempo Mameitagin*
1837年
品位26%

安政丁銀・豆板銀
Ansei Chogin and *Ansei Mameitagin*
1859年
品位13%

memo

銀座の所在地

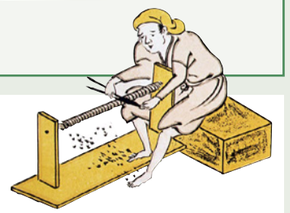
銀座は、江戸・京・大坂・長崎に設置された。実際に銀貨を製造したのは江戸と京で、1800年からは江戸のみとなった。現在の東京都中央区にある「銀座」の地名は、1612年に銀座がここに置かれたことに由来する。1800年に銀座が江戸の蛎殻町へ移った後も地名が残った。

銀座で丁銀をつくっている場面

「銀座巻物」国立国会図書館蔵

11 さまざまな銭貨の発行

Issuance of Various Coins



銭貨の移り変わり

Transformation of Coins

幕府は、江戸時代を通じて寛永通宝の発行を続ける一方で、さまざまな銭貨を発行した。商品流通が盛んになり小額貨幣に対する需要が増える一方、銭貨の材料である銅の供給に限界があったことから、幕府は、鉄や真鍮を材料とする銭貨や高額面の銭貨を発行し、銭貨不足に対処した。

寛永通宝
Kan'ei Tsuho
1636年

寛永通宝の発行は、「寛永」年間（1624～1644年）の後も幕末まで続いた。

寛永通宝（新寛永）
Kan'ei Tsuho (New Type)
1668年

幕府は1668年、江戸亀戸村に新たに銭座を設け、大量に寛永通宝を製造した。それ以前の寛永通宝と比べ、技術が進歩し、より均質で精巧なつくりとなった。

寛永通宝（荻原銭）
Kan'ei Tsuho (*Ogiwara* Type)
17世紀末

宝永通宝 十文銭
Hoei Tsuho (Copper,10 *Mon*)
1708年

元禄～宝永期（1688～1711年）には、国内の商品流通が盛んになり銭貨に対する需要が増加した一方、銭貨の材料でもある銅は重要な輸出品であった。銅が不足気味のなか、増加する銭貨需要を満たすため、軽くて小さな銅銭や十文銭がつくられた。

memo　四文屋の屋台

鍬形蕙斎「近世職人尽絵詞」東京国立博物館蔵　Image: TNM Image Archives

左から天麩羅屋、焼きイカ屋、四文屋。「四文屋」は、さまざまな食べ物を４文単位で商う店。四文銭が流通していたことから、４文は区切りのよい値段であった。

寛永通宝（鉄）
Kan'ei Tsuho (Iron)
1739年

銅の不足から、幕府は鉄を材料とする銭貨をつくった。鉄銭は銅銭に比べて錆びやすく、ぴた銭・なべ銭ともよばれた。
この時期以降の一文銭は、鉄銭となっていった。

寛永通宝 四文銭（真鍮）
Kan'ei Tsuho (Brass, 4 *Mon*)
1768年

明和期（1764～1772年）には、銅と亜鉛の合金である真鍮を材料とする四文銭が大量につくられた。
同じ時期につくられた計数銀貨とともに、盛んな商品流通を支えた。

天保通宝 百文銭
Tempo Tsuho (Copper, 100 *Mon*)
1835年

天保期（1830～1844年）には、銅を材料として一文銭をつくると鋳銭事業が赤字となり、発行益を得るために幕府は百文銭を発行した。裏面には「当百」と表示されている。ただし、額面を下回る価値で使われていたほか、偽造も多かった。

仙台通宝（鉄）
Sendai Tsuho (Iron)
1784年

仙台通宝は領内のみで通用が許された銭貨で、幕府による一元的な金属貨幣発行の例外であった。
幕末に数多く発行された地方貨幣の先駆けとなった。

寛永通宝 四文銭（鉄）
Kan'ei Tsuho (Iron, 4 *Mon*)
1860年

文久永宝 四文銭（銅）
Bunkyu Eiho (Copper, 4 *Mon*)
1863年

開港後、民間貿易の開始にともない国内の商品取引が活発になり小額貨幣に対する需要が増す一方で、銅銭の密輸出もあって銭貨不足が強まった。このため幕府は、鉄製、銅製の四文銭を相次いで発行した。

memo　全国各地にあった銭座

銭座は、銭貨を製造するために設置され、幕府が商人などに、製造量や期間を決めて請け負わせた。全国各地に置かれたが、江戸時代後半になると幕府の統制が強まり、金座・銀座が運営した。

寛永通宝の裏面と鋳造地

佐渡鋳造

仙台鋳造

足尾鋳造

長崎鋳造

topic

枝銭（えだせん）からわかる銭貨のつくりかた

The Money Tree: How to Make Coins

銭貨は、溶かした金属を鋳型に流し込む鋳造によってつくられた。鋳型から取り出したばかりの銭貨は、木の枝に葉や実がついたようにみえることから「枝銭」とよばれた。
枝から銭貨を切り離して磨くことで銭貨として完成した。

銭笵（和同開珎）
8世紀前半
和同開珎の鋳造に使用された鋳型。

坩堝（るつぼ）
17〜19世紀
地金の溶解に用いた土製の容器。

鞴羽口（ふいごはぐち）
8世紀前半
金属を溶かす溶解炉に空気（酸素）を送るフイゴの送風管。

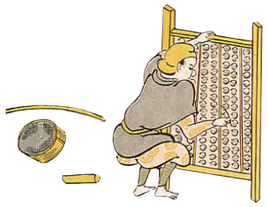
銭貨ができるまで

江戸幕府は、寛永通宝などの銭貨をつくるため、さまざまな技術者を集め、全国に銭座をつくった。江戸時代の銭座の様子を描いた絵巻から、銭貨のつくり方がわかる。
銭貨のつくり方は、古代から基本的に変わらなかった。

1 砂の上に種銭と溶かした金属を流す道をつくるための湯道棒を並べる。

2 表裏の鋳型を重ねて踏み固め、種銭などの形を写し取る。

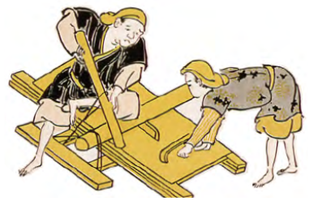
3 溶かした金属を流すための道をつくる。



以下「鋳銭図解」より

4 鋳型から種銭を取り出す。

5 表裏の鋳型を合わせて固定する。

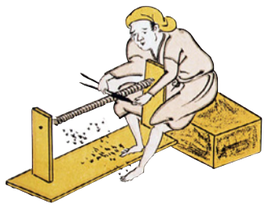


6 立てた鋳型の上部の口から溶かした金属を注ぐ。

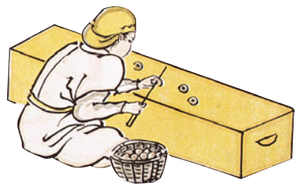
銭貨の仕上げ

7 冷却後、鋳型から枝銭を取り出す。

8 枝銭から切り離した銭貨の側面のはみ出した金属をヤスリで削り取る。



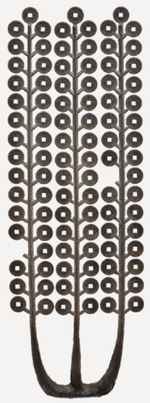
9 中央の穴をヤスリで四角く整える。



10 表面や側面を砥石などで研磨する。

11 銭貨に紐（さし）を通し、銭さしをつくる。

12 完成した銭貨を運ぶ。



文久永宝 枝銭
19世紀
鋳型から取り出した銭貨は、銅の流れた道（湯道）でつながっている。

金のなる木
「金のなる木」は木の枝に金が実るという想像上の樹木で、江戸時代にはこうした絵が多く描かれた。幹や枝にはさまざまな教訓が書かれている。

銭貨の側面を研いだ砥石
17〜19世紀
銭貨をまとめて四角い棒に通し、砥石で研いだ。その痕が半円のくぼみとなっている。

銅ができるまで

銅は、鉱山から採掘した銅鉱石を製錬・精錬し、純度を高めて銭貨の材料となった。

①採　鉱
鉱山から銅鉱石を採取。

②選　鉱
良質な部分を選び出す。

③製　錬
高温で加熱して銅を取り出す。

④精　錬
再度加熱し不純物を取り除く。

『鼓銅図録』より